

新春懇談会

明けましておめでとございます。昨年は地下水資源という共通の資源を持つ国内自治体が東川町に集まって「安全安心でおいしい地下水サミット」を開催、町の豊富な水資源に改めて気づかされた年でした。私たちが住む自然環境の大切さは、今後ますますその重要性を増す一方です。そこで今年には自然環境を生かして、日々食という資源を生産している町内の農業者の方たちにお集まりいただき、農業者の目から見たこれからの町の環境と農業のかかわりなどを語っていただきました。



聞き手・総合進行/町長 松岡市郎

松岡 今日お集まりの皆さんはそれぞれ個性ある農業をやっているからいい。まずは今こんなことをやっているということを紹介ください。

松家 水稲と施設園芸を主に、父が水田と畑作、私は施設園芸を担当しています。お米、大豆、小豆のほとんどを発芽加工し、付加価値をつけて販売しています。

佐竹 小規模でやっています。父の代から始めたお米の有機栽培と特別栽培で付加価値をつけています。

津谷 水田農家ですが、5、6年前に転作でブロッコリーを始めました。

ていました。飲食店で使ってもらっているお米からつながることもあり、新しい出会いが楽しいですね。

松岡 津谷さんはブロッコリー栽培でテレビにも出ていますね。ブロッコリーは、単に食べるだけでなく、いろいろな食べ方も研究しておられるんでしょう？

津谷 たくさん出しているの食べ方も、と女性部の方たちに協力していただいて、全体で取り組んでいます。

10年くらい前に農協女性部の簿記グループで朝市をやった事例発表を



佐竹 国広さん

1977(昭和52)年生まれ、33歳。東川町出身。北日本自動車工学校(芦別)卒。5年前に後継者として就農。昨年、父良洲さんから経営を引き継ぎ3代目。13ヘクタールの水田経営。個別取引が主。ハーブを利用した有機農法による独自の高品質米出荷などで高い信頼を受けている。

息子が来春からやるようになるんです。後継者がいる、ということになりました。

牧 水田と施設野菜で、私の担当は、養液栽培のサンチュ、パセリ、ベビーリーフ。もう12、13年目。早いですねえ。

でもそんなでもないかな」という思いがあったようです。国の所得補償が出て、やつと農家も目の目を見ることがなくなった、という気持ちになったんですけど、今になってみたら、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)なんて話が出てきて「あれれ、話が違うんじゃない？」という感じで、よかつたのかな？

松岡 われわれが小さかったころ、親は息子、娘に農業をさせたくない、という気持ちが強かったようですが、今は意識が変わってきていると思います。最近後継者もずいぶん帰ってくるようになってきましたね。

津谷 うちの場合、ゆくゆくは息子が継ぐかもしれない、という話も聞いていたんです。きちんとした会社に見ても「給与収入が低い、将来を見

たことがあつて(朝顔の会)、その当時は「うわつ、すごいねえ」と遠い存在だったんですけれど、今やそれが当たり前になってきた。今年の春からホクレンショップでもやるようになって、個人でお店に持つようになって、外にテントを置いてショップ側で売ってくれる、という方式で、店側でも売り上げが増えているそうです。そういう時代なのか、私も思っています。

松岡 農業にはいろいろな魅力があると思います。外に向かつてその魅力を分かってもらうことも大切です。

昨年ラトビアに行きまして、地元的女性が山で採ってきたきのこを酢漬けにして保存していました。ジャムを作つて「これは私が作ったジャムです」と自慢して出してくれた。土からの恵みを加工して人に楽しませてくれた。皆さんも十分にできるのではないかと思うのですが…。

佐竹 農家をやっていると、人との関わりが少なくなる。グリーンツーリズムなどで外から人が来てくれることが自分自身の勉強にもなっています。これからのそういうことをやっていけたら、と思っています。

松岡 いろいろな人と出会って、何



津谷 千代子さん

1960(昭和35)年生まれ、50歳。東川町出身。旭川商業高校(旭川)卒。夫俊弘さん(52)との間に2男1女。父親(83)から家業の農業を引き継いで21ヘクタールを経営(水田、ブロッコリー)。5年前からはじめたブロッコリーが評価高い。長男(23)が今春から家業の農業を継ぐ予定。



牧 美紀さん

1971(昭和46)年生まれ、39歳。旭川市出身。旭川農業高校(旭川)卒。夫清隆さん(40)との間に3男の5人家族。清隆さんは入植5代目、道農協青年部協議会会長。米作16.3ヘクタール、みつば、トマト、サンチュ、パセリ、ベビーリーフ。農協女性部の「フレッシュ・ミズの会」事務局。



松家 孝志さん

1973(昭和48)年生まれ、37歳。東川町出身。北海道農業大学校(本別)卒。卒業後、農業後継者として就農。(有)松家農園取締役。約10ヘクタールに水田、大豆、小豆、そば、はと麦、園芸(野菜苗、花ゆり、ほうれん草)。施設もの担当。生産物をそのまま出荷のほか、独自ブランドの発芽玄米、黒米、赤米、お茶(そば茶、はと麦茶)加工品として出荷・販売。

よりいいものを作れる」と…。それ以来自分で責任を持つてやるようになったんですけど、両親からはやり方が違う、とよく言われます。でもその辺は、大目に見て任せてもらっている、という感じですね。

佐竹 お客さまと直接取引をしているので、中にはほかの産地に移った人もいますし、ほかで買っていてうちに来てくれた方もいらつしやいます。また戻ってきた方は「味が違う。やつぱりこのお米じゃない」と言ってくれている人がいるので、やることは出来ないですね。自分のファンがいる、気にかけてくれる人がいる、というのは、力になり励みになります。

昔からのお客さまから新しい人を紹介、というのが一番多いですが、自分は販売が好きなので、ここ数年は道の「愛食フェア」や、主要都市で開いていた「まるしえ」といったイベントに出店して、そこからまたつながっていく、という方向でや

かをあげることもあるし、相手からもらうこともある。それが魅力、というわけですね。

津谷 うちで作っているブロッコリーは、出荷の仕事時間が午前中だけで短いです。だから仕事をお願いしている方はパートの女性ばかりです。農家ではない若いお母さんばかり来てくれていますが、出荷できないハネ品を持つて帰ってもらうこともあつて「とてもおいしい」と喜んでもらっています。「好きじゃなかったんだけど、これなら食べられる」といわれると、「ああ、やっていてよかつた」と農家の良さを